

の反響を呼んだ論文。「母性」や「子ども」についての我々の社会通念を、大きな観点から見直してみたい人にはうってつけの本である。本書には、先に挙げた論文の他、「出産の社会史」や「近代家族における子

どもの位置」などの社会史関連の論文、現代家族に関する論文、フェミニズム関連の論文なども収録されており、多様な読み方ができる。

(お茶の水女子大学)

『倉橋惣三「保育法」講義録』 土屋とく 編 (フレーベル館)

『新幼稚園参考書』 東京都私立幼稚園協会 編・著 (フレーベル館)

『のぼらの村のものがたり』 ジル・バークレム 作 (講談社)

村石 京

『倉橋惣三「保育法」講義録』

「幼児の教育」誌を継続して読んでおられる方なら、このタイトルを見て「この間『幼児の教育』で読んだわ」とおっしゃるでしょう。その通りなのです。

一九八九年一月から同年五月号迄の『幼児の教育』に

掲載されていて、私もその時読みました。それがこの度一冊の本としてまとめられて、フレーベル館から発刊されました。

この「保育法」講義録とは、私どもの附属幼稚園の大先輩である菊池フジノ先生が、まだお若い頃(昭和

九年四月)に、その当時の倉橋惣三園長が保育実習科の主任教授として、実習科の生徒に講義されていたものを学生から借りて写され、「倉橋先生の講義のノート」を作りあげられたものとうかがっています。倉橋先生の幼児教育の講義の内容の深さは勿論多くの人々から語り伝えられていますが、それをこのようなノートに記されておかれたのは偏に菊池先生の幼児教育に対する情熱と、倉橋先生に対する尊敬の賜であったといえましょう。そして菊池先生は附属幼稚園教官としての長い在任中もその後も、ずっとこのノートを大切に保管して、折ある毎に開き学ばれたことを知り、感慨にうたれる思いでした。

その内容については既に御存知の方もあるかと思いい、見出しだけ載せますと「第一章 幼稚園」「第二章 保育法の原理」「第三章 保育法の原則」「第四章 保育方案」「第五章 保育項目」から成り立っています。これは昭和九年四月より翌十年三月まで一年間にわたって行われた保育法講義内容です。これをみると

倉橋惣三主事が幼児教育の基本理念を学生たちに大きな信念をもって語り、保育者の養成と幼児教育の達成に熱い情熱を注いでおられたことがわかります。そして実際に講義をされてから半世紀以上の時を経た今、現代の幼児教育の場にある者に働きかける大きな原点をもち、改めて幼児教育を考えるきっかけを与えてくれる、時を越えた新しささえ感じます。

この大切な宝物を大事にしておられた菊池フジノ先生と、これを世に出すための機会と努力をされたお茶の水女子大学児童学科第一回生として、幼稚園教員養成の場で活躍されている土屋とく氏に、感謝の気持ちを顯わしたいと思えます。

『新幼稚園参考書』

幼稚園参考書は昭和三十六年に刊行され、昭和三十九年幼稚園教育要領改訂時に改訂され、そして新教育要領告示、施行の時、全く新しいものとして生まれ変わりました。この書は幼稚園教育に関して、その教育

の本質、現場での教育の計画と実践、その運営及び幼稚園教育の歴史などに関して多くの実践例をあげて編集されたものです。新教育要領の基本をふまえ、幼稚園教育のあり方と実践を提示する書として発行されました。

今年もきっと幼稚園教員の養成課程を経て多くの新しい教員が現場で活躍しておられると思いますが、中には学生時代に学んだ保育の原理が実際場面では円滑に運べなかったりしてとまどった思いの方もあると思います。壁につきあたったときそれを乗り越えるには、自分が学んだことを今一度思い起こすことや、現在の悩みや迷いを話しあったり先輩からのアドバイスを受けることや、より前進して新しいものを受け入れる努力をすること、例えば講習会や研究会に参加したり、本を読んだりするなどして種々な形で自分の受け皿を広げ、しっかり固めていくことが必要です。それがないと現実の子ども達を前にして、その多様性に驚き、また一方では責任の重さに押しつぶされてしまい

そうになります。そのような思いのとき、実際の幼児教育はこうして行われているという多くの実践例を載せて、現場の人たちに方向性と安定感を与えてくれるものとして、この書はきっと役割を果たしてくれると思います。

また更に幼児教育について深く知りたい、学びたい者にとつて、巻末の参考図書は文字通り参考になるものが多く載せられているので、これを見ながら間口を広げ、掘り下げていくための書を取り出すのに役立つことが多いと思います。

『のぼらの村のものがたり』

『のぼらの村のものがたり』は四季に因んだ話で、四冊の絵本で構成されています。

小川に沿って続く野ぼらの茂みの中に目をこらして見ると、かわいい煙突から一すじの煙、木の幹にはドア、その奥に急こうばいの階段……。ここにのぼらの村があります。ウィルフレッド坊やの誕生日をアッブ

ルおじさんやもりねずみだんしゃくや、ディジイ夫
人、そして子どもたちみんなでお祝いするのが「春の
ピクニック」。「小川のほとり」では、ポピーとダス
ティの結婚式を村中みんなで楽しく、心をこめて祝い
ました。「木の実のなるころ」では、木の実を集めに
行って迷い子になったブルムローズを探すのに、心配
で村のねずみたちは夜なか中探ししました。「雪の日の
パーティ」では、ねずみたちはとっておきのおしゃれ
をして集まり、ダンスをしたり、クリームケーキやシ
チュウやブラックベリーポンチを食べたりして明け方
まで楽しみました。窓の外ではまた雪が降りはじめま
した。そしてのぼらの村のねずみたちは、みんなぐっ
すりと眠っていました。

本当に平和で穏やかなのぼらの村の話、これは小さ
い頃から庭の草花や虫が好きな女の子だったシル・
パークレムが、成長してロンドン市内に毎日通学する
ようになった頃、自分の生まれたロンドン郊外のエビ
ングの豊かな自然の生活を改めて見直すようになり、

これが『のぼらの村のものがたり』になったとありま
す。七年の歳月をかけて生み出されたこの絵本には、
優しいねずみたちの様子を教えてくれる挿絵が多く画
かれています。そして岸田稔子氏が丁寧に訳をつけら
れました。大人が読んで心がやすらぐ思いがするのは
勿論ですが、子どもたちには保育者が一頁ずつ絵を見
せながら読んであげたら、きつと気持ちがあつたりし
てくるのではないでしょうか。保育者に読んでもらっ
たこの本が身近にあつて、時々取り出して絵をくりか
えし見たら楽しいですね。ねずみたちの様子がとても
可愛らしいからでしょうか。最近になってデパートの
食器売り場などでは、ティーカップやケーキ皿など
も、この絵のものを見かけるようになりました。ま
た、野ぼらの村のものがたりの続編が二冊、やはり講
談社から出版されていることもつけ加えておきます。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)